

2022年3月11日発行

往復書簡の研究

宮 田 穰

相模女子大学紀要 VOL.85 (2021年度)

往復書簡の研究

宮 田 穰

Study of round-trip letters

Minoru MIYATA

Abstract

This paper focuses on the modern significance of "correspondence" as part of the study of letters. Therefore, this time, we took up a recent book on "round-trip letters" published mainly by celebrities as an example, and considered the value leading to correspondence and the attractiveness of communication by analogy.

What I learned through the three cases was that by exchanging letters, intimacy and mutual understanding were deepened. However, while the relationship gradually deepened in the letter, the relationship became unstable from time to time, although the friendship deepened in the email. In addition, while letters exchanged calm and cohesive thoughts, emails often exchanged short content with emotions ahead. I think this point is related to whether or not there is a certain distance and time between the two.

The future task is to first verify the above hypothesis. Furthermore, when penpals are viewed as a communication mechanism that builds intimacy, mutual understanding, and relationships of trust, it is necessary to clarify the requirements that support them.

Key words : Round-trip letters, Correspondence, Analog, Communication

1. 研究背景と意図

ここ数年、継続的に手紙に関する研究を行っている。その中でも、最近「文通」の現代的意義に注目している。それは、単に手紙というメディア特性のもつ、時代を超えたコミュニケーション力を明らかにするだけでなく、継続的にやり取りする中で生まれる価値にも注目する必要があると考えているからである。とくに、ネット社会の現代において、あえて手紙でのやり取りでしか実現できないことを明確にできれば、長い歴史の中で育まれてきた手紙文

化を、現代において再評価することになる。それは、これからの時代に向けた、ネット以外のメディア活用による質的なコミュニケーションの方向性を示すことにもなると考えている。

ただ、研究方法として、実際の文通を研究素材とすることは、研究者本人の手紙を除けば難しい。そこで、著名人を中心とした、出版化されている最近の「往復書簡」に関する書籍を事例として採り上げ、文通につながる価値やコミュニケーションの魅力を類推的に考察する。

2. 前提

本件の研究を進めていくにあたり、最初に前提として明確にしておく必要がある点は、現実の文通と「往復書簡」を比較し、類推できる範囲を押さえておくことである。

まず、一般的な文通は、それぞれ文通相手と私的な手紙をやり取りするものである。相手はさまざまであり、文通期間もいろいろである。手紙の内容や形式も自由に設定されている。また、文面は手書きで表現される場合が多く、文面の内容以外にも多様な情報が、手紙全体を通して相手に伝えられる。ただ、その手紙やその内容は文通相手と当事者にのみ開示されており、一般には秘匿されたままとなっている。

一方、出版化されている「往復書簡」は、出版社の編集者が企画し、雑誌や書籍などにより一般に公開することを前提としている。この点が、最も大きな違いといえる。つまり、手紙をやり取りする相手との間にも開示されるのではなく、文面に示されるやり取りが一般に公開され、読まれることを意識した表現になっている。このことは、手紙の文体に一般向けとしての配慮がなされていることや、予定されている文面の分量が事前にほぼ決まっていることを意味している。やり取りされる期間や回数も、事前に出版社の都合により決められている。つまり、一言で言えば、編集という制約が加わっている。

さらに、出版物であるため、文面は活字化される。そのため、手書きの文面により伝わる多様な情報は、捨て去られることになる。活字で表現される内容のみがやり取りされ、公開されることになる。このことは、実際の文通に比べ、情報の質が目減りしていることに他ならない。

以上のように、実際の文通と出版化された「往復書簡」を比較したとき、以下が指摘できる。

- ①規格化された文通であり、読者に向けて編集されている。
- ②表現形式も活字に限られた文通になっているといえる。
- ③一般公開されることを前提とした「公開文通」といえる。

このようにみえてくると、「往復書簡」は実際の文通に比べ、かなり制約された条件の中でやり取りされる手紙になっているといえる。しかし、手紙形式で表現され、活字化された内容が回数を重ねる中で、相手とのやり取りの内容や質がどのように変化して

いくかがわかる点は、「往復書簡」が示唆する文通の価値として注目できると考えている。

3. 研究対象の選定

今回の研究対象は、「往復書簡」が扱われた書籍である。独自に調査したところによると、添付資料の通り20件程度が挙げられるが、その中から今回の趣旨に合う対象を選定した。

選定基準としては、①ネット社会といえる2000年以降に出版された比較的新しいもの、②やり取りする双方が異質な影響を与えやすい異なる立場にあるもの、③やり取りする内容の変化など、展開がわかりやすいものといった視点から、以下の3作品を選定した。

なお、(3)のみケータイメールのやり取りによる文通も含まれた、著者による創作物（フィクション）となっている。かなり特殊な事例ではあるが、この事例を組み入れた意図は、いくつかの点で手紙とメールの比較ができること、そしてネット社会らしさがやり取りの中に、わかりやすく示されていると考えたからである。

- (1) 佐藤愛子×小島慶子『あなたは酢ダコが好きか嫌い』小学館、2020
- (2) 松本幸四郎×松たか子『父と娘の往復書簡』文春文庫、2011
- (3) 坂元裕二著『往復書簡 初恋と不倫』リトルモア、2017

4. 各事例の検討

- (1) 佐藤愛子×小島慶子『あなたは酢ダコが好きか嫌い』小学館、2020

この往復書簡は、週刊誌「女性セブン」2018年1月～5月に連載された。ちなみに掲載誌の「女性セブン」は、1963年創刊され50年以上にわたり発刊されている、30～40代女性を主な読者対象とした週刊誌である。

なお、作家の佐藤氏は90代、コラムニストの小島氏は40代である。年齢差は約50歳と、一般的な親子以上の世代差がある。今回の手紙を通じたやり取りは、想定読者より少し上の世代の小島氏が抱える人生の悩みに対する、人生の大先輩である佐藤氏からの体験に裏打ちされた含蓄のあるアドバイスが、主な内容になっている。(世代は掲載時)

往復書簡の流れは、小島氏から始まり、佐藤氏に

よる第17通まで続けられている。内容的には、①夫婦関係について、②世の中の気になる風潮について、③生きることの辛さなど人生観について、④今後の夫婦関係について、という流れとなっている。

では、往復書簡により、意識や価値観の変化が見られる部分を挙げてみたい。

①の部分では、夫の突然のリタイアにより、小島氏が日本とオーストラリアの二重生活を仕事の都合でやむなく行っている中で、「夫はなぜ、私の孤独と不安にこうも無頓着なのでしょう。」と悩みを募らせている。それに対して、佐藤氏は「えてして人間というものは、愛していればいるほど、相手からも同量の愛を得たいと思うものです。」「慶子さんは我慢のしすぎです。愛し過ぎです。」と答えている。そして、小島氏は「私はお釈迦様の掌の上の孫悟空のように、夫の手の上で踊っているという佐藤さんのご指摘は、悔しいけれど当たっているようです。」と、今までの見方を修正している。

また、③の部分では、局アナからフリーになったあと、「勝手なことを言いたくて会社を辞めたのに、勝手なことを言っただけでいい自製してしまうのです。」といった、自分の空気の読めなさや、生きづらさについて悩みを深めている。そして、カウンセリングに通うまでになり、「しんどさの原因は、異常に強い倫理観だと判明したのです。要は自分で勝手に「こうあらねばならない」と厳しいルールを作って、自縄自縛になっているのだと。」と自己表明している。そのような状況に対して、佐藤氏は「今の時代は何かという人の気持ちをわからなければいけないといい過ぎると私は思います。…そんなことばかり考えてるから現代人は萎縮してるんです。」ときっぱり言い放っている。

さらに、作家として小島氏が「数年前に書いた半生記が原因で、親族の一人に事実上縁を切られました。悲しいことですが、仕方がないのかもしれませんが。」と述べていることに対し、佐藤氏は「人間というこのいとして厄介きわまる存在の、その眞実を描こうとすれば、当然、細部、深部を見据えてえぐることとなります。」「書くことは苦しいけれど、楽しい」と、作家の大先輩として、これまたきっぱりと言い放っている。

このようなやり取りを重ねていく中で、小島氏は名前を知っていてもあまり面識のなかった佐藤氏に対して、「シスターフッド」とまで自分の理解者としての親近感を抱くようになっていく。

そして④の部分では、小島氏の夫との今後の関係

として、現在は同居しながらいずれはタイミングを見て離婚する「エア離婚」を表明しつつも、「不思議なことに、エア離婚のことが成立してからの方が夫のいいところがわかるようになりました。」と矛盾した内容を述べている。それに対し、佐藤氏は「つまるところお二人の相性はそれなりにいいのだと思う。お二人は凹と凸。鍵と鍵穴。一見全く異なる形でいながら、ガチャガチャ回すとそれなりにうまく嵌る。凸はあなた、凹はご主人です。」「あなたたちは別れません。それが私の結論です。」とまで、きっぱりと言い放っている。小島氏と佐藤氏は、お互い相手のことをわかり合える関係と理解しつつ、相手におもねることなく、それぞれの主張を率直に述べ合う点で、往復書簡の真剣さと深さが感じられる。

今回の往復書簡全体から2人の関係変化を整理すると、著名な大先輩の作家とメディアで活躍しているフリーのコラムニストが、作品を除けば初対面に近い関係からスタートしている。お互いのイメージは、一般の人々がイメージするものと大差はない。しかし、やり取りを重ねていくうちに、佐藤氏は小島氏のイメージを大きく修正し、小島氏の悩みの本質を見極められるようになっていく。そこには、佐藤氏の人生経験が多く作用している。

一方、小島氏は悩みや本音を素直にさらけ出すことで佐藤氏の率直なアドバイスを得、自らではなかなか気づけない悩みの本質に、近づくことができるようになっていく。そして、2人の関係は「シスターフッド」と、小島氏が意識するまで親密なものに変わっている。

2人にとって、往復書簡の試みは出版社の企画であったとしても、急速に相互理解を深める仕掛けになっていることは確かである。そして、小島氏にとっては、人生の価値判断を見極める貴重な機会にもなっている。一方、佐藤氏にとっては、自分の半分ほどの年齢にある女性との世代差を、再認識する貴重な機会にもなっている。相手の課題を考える中で、自らの人生を改めて振り返り、意味づけする機会にもなっている。このように、往復書簡は真剣なやり取りが伴えば、より親密な関係が築かれるだけでなく、相互理解の深まりを通して、お互いの価値観に直接影響を与え、ときに価値観を大きく変えるだけの力が認められる。

この事例では、巻末に往復書簡後に行われた対談が掲載されている。対談と往復書簡を比較すると、対談の方は互いの言葉のやり取りの軽さや、言葉へ

の拘りの薄さが感じられる。

(2) 松本幸四郎×松たか子『父と娘の往復書簡』文春文庫、2011

芸能人の親子による往復書簡には、特殊な要素が含まれている。1つは、普通の親子であれば普段できそうな日常会話の機会が、なかなかもてていないことである。もう1つは、俳優など同じ職業の場合は、先輩と後輩の関係として、親子を超えた関わりが生じてしまうことである。このような特殊な関係は、親子関係の上に俳優同士としての職業関係が重なることで、コミュニケーションが複雑になり、一般に比べて相互理解の難しさが指摘できる。

ちなみに、松本幸四郎氏には3人の子どもがいる。その末っ子が松たか子氏である。幸四郎氏は1942年生まれ、たか子氏は1977年生まれであり35歳差が認められる。また、今回の往復書簡の掲載誌は、文芸誌の「オール讀物」で2006年5月号から2年間にわたって連載されている。つまり、たか子氏が30歳の頃、35歳離れた父親との手紙のやり取りの記録といえる。たか子氏から始まり、回数は24回（往復12回）にわたり手紙のやり取りが続いている。

往復書簡の主な内容は、たか子氏の役者としての悩みや、人生で出会ういくつかの壁など、改めて父親に聞きたいことについて、かなり本音が語られている。次に、具体的なやり取りについて紹介している。

まず、今回の往復書簡を行う意味について、それぞれ以下のように書かれている。

たか子氏「父との手紙のやり取り、しかも公の場で。真っ白なパソコンの画面の前に、茫然となった日々。しかし、やってみようと思った。「勘」をこの際信じて、この「文通」を始めてみようと思う。」

幸四郎氏「この連載は、君との往復書簡だという。会話のない親子ではないと思うが、僕らの話題はほとんど芝居のことばかりだから、改めて手紙となると、さて、どうなることか…。

もっとも、こういう機会でもなければ、おそらく僕は、今までの役者人生を振りかえって、君に何かを言うこともなかっただろうし、また君からこんな質問を受けることもなかったと思っている。」

2人のやり取りから、手紙の場が特別な場だと認識しつつも、何か期待感をもって受け止めようという様子が窺える。そして最初の話題では、役者人生について次のように語られている。

たか子氏「今年芝居を始めて13年目を迎えました

た。「俳優とは？女優とは？この狭い芸能の世界は謎がいっぱいです。人としての時間の過ごし方、俳優としての時間の重ね方、常識と非常識、私は生きていく上で様々なことにぶつかっては迷ったり、悩んだり、傷ついたりしています。あなたはどんなことに、どんな風に闘ってきたのでしょうか？」

幸四郎氏「芝居というものは、何度もやっているけどだんだん上手くなっていくように思うだろうが、それは違う。芝居というものは、何度もやっているうちに、だんだん下手になっていくんだよ。上手くなったと思うのは、慣れからくる錯覚だ。「それに、努力すれば報われるかといえば、必ずしもそうではない。しかし、努力を怠れば、一日で自分にわかり、二日で相手役にわかり、三日でお客様にわかってしまう。現状維持ですら、役を勤めているのだという自覚なしでは有り得ないのだ。何十年役者をやっても、余裕などできはしない。」

次の話題としては、友だち関係について、親子の会話が続いていく。

たか子氏「どの家庭に生まれるかは選べないのではないかな。ただ、友だちは自分で作る、偉そうなことを言えば、選ぶ、のではないかなと思うのです。逃げてばかりの自分でいたら、同じ匂いを持つ友人としか関われない、心を開けない、とも思います。あなたにはどんな友達がいて、どんな人との出会いがあったのでしょうか？」

幸四郎氏「人間、一生のうちで何人友達を得ることができたかで、その人がわかるとか、友達は自分の鏡だとか言うね。でも、こんな僕だから、友達は極々少ない。というよりはっきり言えば二人だけだ。「心を開くばかりが友達の形ではない。少し引いたところから見守る友達だって、友達たりうるだろうし、相容れないものを認め合うのも、それはそれで素晴らしいと思う。そういう意味では、君にも素敵な友達がいるようだね。お父さんは初めて知ったよ。…」

意外にも、手紙の場で初めて、たか子氏のこだわりの友達について、幸四郎氏は知ったようだ。

また、たか子氏は、それぞれ二度の手紙のやり取りを通して、手紙の持つ意味について次のように言っている。そして、幸四郎氏も次のように続けている。

たか子氏「手紙は、書くのも読むのも、それなりの集中力を必要とするような気がします。そして、書くときに必ず生ずる、「言葉を選ぶ」という行為はとても奥ゆかしく素敵なことに思えます。そして

また、自分の父親のことを、思わず「あなた」と書いてしまうことで、微妙な距離感のある私達の関係が、そのまま文章に表れてくるし、思いもよらぬ父親の「告白」を知るにも、直接言葉で言われるのとはまた違う、不思議な緊張感があります。」

幸四郎氏「僕ら人間は、本能的に言葉を使わないで意思を伝える術を持っている。ただ、文明が発達し過ぎて、言葉ばかりでなく、君も愛用している「絵文字」なんていう文化(?)もあって、感覚だとか感性とかに委ねられる領域が、少しずつ疎かになっているようで、哀しい。改めて手紙を書いていると、伝えたいのに伝えられないもどかしさ、「舌っ足らず」とは少し違った葛藤が、僕の中で疼いている。しかし、これは言葉では伝えられない。僕の手紙の行間から感じとって欲しいと思う。」

お互い手紙のやり取りを、少しとはいえ実際に行ったことによって、出てきた言葉だといえるだろう。手紙を通して感じる、普段とは異なる親子の不思議な距離感についても触れられている。それは、手紙を通すことによって、親子であっても少し距離を置き、冷静に見つめることを必然的に求められる、メディアの仕掛けが機能しているからだと考えられる。

ときには、次のような哲学的な話題についてもやり取りされている。

たか子氏「ところで今更ですが、「普通」って何なのでしょうね。人は多く、普通と言うことを、代わり映えのしないことという風に、ネガティブにとらえがちのような気がします。私にとって、「普通」とは、穏やかな、安らかな状態のように思えます。」「自分の居場所があると感じられることが、「普通」であるということなのでしょう。いずれにしても、非常識と常識の間のような、そんな何処か矛盾した場所に、私は「普通」を感じているみたいです。本当に不思議な人生を、私は今、歩んでいます。」それに対して、次のように答えている。

幸四郎氏「でも忘れてならないのは、人それぞれに、「普通」の感じ方も千差万別だということだ。どんなシチュエーションに安らぐのかは、顔形が違いうように、その人が普通と感じ、その感覚が快いものであるならば、ひとつの概念で括ることはできないと思う。」「始めに言ったように、舞台の上で一心不乱に芝居をしている時にも、ごく「普通」であるかのような安らぎを見出せるようになった。」「たか子にとって父親であっても、先輩であっても、僕もまだ人生の途中だ。君が言うように、僕もまた役者として不思議な人生を歩いているのかもしれない。

そして、それこそが君の言う「幸四郎的生き方」なのかもしれない。」

さらに、自分の境遇についての悩みも、次のように書かれている。

たか子氏「デビューしたときのスポーツ紙の見出しは、「幸四郎の娘デビュー」でした。まあその通りなわけで、私は特別な感情を持たず、反抗心が芽生えるわけでもなく、その記事を読んでいました。「これ私?」という感覚に近い、他人事のような気分。」「それからかもしれません。「幸四郎の娘」であることを楽しめるようになったのは。私はこの境遇を財産として、隠すこともひけらかすこともしない、と自分の心に改めて誓います。…だって、しょうがないんですもん。あなたが、九代目幸四郎という生き方を信じて歩んでいると同様に、私も自分を信じていくしか道はありません。」それに対して、次のように答えている。

幸四郎氏「「生きることの難しさ」は、人間にとって普遍のテーマだ。時代も状況も異なる世界の出来事を演じていても、生死を語ることはとても重たい。「生きること」は容易ではないけど、勇気をもって生きなければ、人として生まれてきた意味はないと思う。」「幸四郎の娘」として生を受けた運命を、君が有意義に精一杯生きているのを知って、僕はとても嬉しい。」

このように、うすうす感じていながらも面と向かって言えない悩みを、冷静にカミングアウトできるのも、手紙ならではの利点である。そして、このやりとりを通して、親の名前が肩書のようにつけられてしまうことを前向きに受け止めてくれている娘の本音を知ること、親子の関係はより太い絆へと、確実に変化していることが窺える。

以上までのやり取りは、全体の中でほぼ前半に当たる。後半についても、仕事や人生の節目での悩みなどについて話題が続けられていくが、長くなるので割愛したい。ただ、親子での往復書簡の体験を通して、改めて手紙に関する思いが語られている部分があるので、以下引用する。

たか子氏「…この「往復書簡」というものには不思議な魅力がありますね。お互いの近況を報告すること、すなわちわたしたち親子の場合、芝居のことについて、会話よりも多くのことを伝え合っていますよね? それと同時に、季節の移り変わりにも、目がいくようになりました。異常気象にうんざりしながらも、ふと涼しくなった今日この頃のことを、こんな風に文字にして、大切な人に伝えられること

…。私はとても嬉しく思います。こうやって書き続けていると、人に伝えたいことってたくさんあるんだな、と気付きます。芝居の台詞ではない、自分自身の言葉で書いているわけで、「演技」ではないのですから。…ありのままの私達の関係を、このやり取りの中で実感しています。」

一方、幸四郎氏は「文庫版あとがき」の中で、次のように述べている。

「…もしも、この連載が無かったなら、果たして僕ら親子は、こんなに親密で正直で明けた関係になっていただろうかと、今になって思う。…手紙を書きながら、毎回、僕自身の来し方を振り返るという作業をしていた。」

印象的な言葉を抽出すると、たか子氏は「会話より多くのことを伝え合っている」「人に伝えたいことはたくさんある」「演技ではない、ありのままの私達の関係を、このやり取りの中で実感している」と、幸四郎氏は「こんなに親密で正直で明けた関係」「手紙を書きながら、毎回僕自身の来し方を振り返る」となる。この部分だけを見ても、距離感や深さなど、往復書簡がお互いの関係を変えたことは間違いないといえる。

(3) 坂元裕二著『往復書簡 初恋と不倫』リトルモア、2017

まず、この作品で扱われている往復書簡の特徴と、ストーリーの流れを簡単にまとめておく。

主人公は、中学1年生の玉埜広志と同級生の三崎明希である。中学で玉埜はいじめを受けており、クラスの生徒だけでなく教師からも無視されていた。そのような中、同じクラスにいた三崎明希は、玉埜に同情しつつ、密かな愛情も抱いていた。そして、ある日学校の玉埜の靴箱に、そっと初めての手紙を入れた。当初、玉埜は戸惑い、次のように拒絶する姿勢を示す。「玉埜です。返事を下さいと書いてあったので返事書きます。迷惑です。…」

しかし、その後軽いやり取りを続けるうちに、少しずつ打ち解け始める。そのうち、あるショッピングセンターの屋上で対面するようになる。手を初めて繋いだのは、その時だった。また、あるサービスエリアで一緒にラーメンを食べたこともあった。三崎は手紙で、なかなか他人には話せない身の上話をするまでになり、親しみはどんどん増していった。

しかし、平穏な関係は長くは続かない。1年生の終業式の後、三崎は行き先も告げず転校していった。玉埜は家族の都合で、終業式には出られなかった。

玉埜のいない終業式で、ちょっとした事件があった。三崎が、玉埜へのいじめの実態を式の途中、大声で話し出したのだ。そして、式は中断した。そのことを玉埜が知ったのは、その学期が終わり、2年生になった後だった。

[ここで、時間が10年ほど経過する。]

玉埜は社会人になった。ある広告代理店で仕事を始めていた頃、突然三崎から手紙が、玉埜の実家経由で送られてきた。懐かしく思いながら手紙を読んでいるうちに、三崎がある事故に巻き込まれたことを知る。そして、その手紙には三崎のメルアドのみが記されていた。その後、2人のやり取りは手紙からケータイメールに移行する。

その事件とは、深夜高速バス事故だ。ある日の夜、神戸を出発した高速バスは、翌朝東京に着く予定だった。しかし、少し手前の海老名サービスエリア付近で中央分離帯にバスが乗り上げて横転し、死者8名を出した。三崎は幸い無事だった。ただ、厄介なことが起きた。運転手は逃走し、行方不明になっていた。そして、何とその運転手の桂木は、三崎の婚約者だった。一緒に東京へ行き、その後結婚するはずだった。

その後、三崎は逃亡中の桂木を探し続けることになる。社会人となった玉埜とのやり取りは、桂木に関することが話題の中心となり、そのうち玉埜も捜索に加わるようになった。そして、半月ほどの逃亡の末、桂木は佐渡で見つかり、三崎ではなく玉埜によって桂木が確保される。しかし、なぜか2人はそのまま一緒に逃亡を続けることになる。

実は、玉埜と桂木が逃亡中、桂木が三崎と心中するつもりでバス事故を起こしたことを白状する。玉埜は、もし桂木が逮捕されると、桂木と三崎の関係や心中相手として三崎のことが世間に知れ渡り、多大な迷惑を被ることを案じた。だから、なかなか桂木を連れて自首できなかったという。それを聞いて、三崎は自分が心中相手だと思われていたことを受け入れると答える。そして、最後のメールで玉埜は三崎のことが好きだと告白する。その返信では、三崎も玉埜が初恋相手で、今も変わらず好きなことを告げる。その後、海老名サービスエリアにいる2人を三崎が迎えに行き、ようやく玉埜と桂木は出頭することになる。

玉埜は拘留所で、起訴か不起訴かを待ちながら、三崎に最後の手紙を書いている。現在の心境や、逮捕時の桂木の様子などである。三崎からの返信では、新聞に桂木が（心神耗弱により）無罪になる見込み

だと伝えられる。

この朗読劇の最後は、玉埜が三崎から始めてもらった手紙を再読し、「玉埜です。返事くださいと書いてあったので返事書きます。お手紙ありがとうございます。嬉しかった。」と返信したところで、この往復書簡は終わる。10年以上の年月が流れ、最初の拒絶とは、正反対の返事になる。

以上のストーリーとやり取りの様子を踏まえた上で、特徴的な部分を整理しておく。

まず、複数のメディアによるやり取りの特徴の違いである。

最初は、高校時代の靴箱レターである。三崎から玉埜へ突然届いた手紙は、一方的なものだった。当然のことながら、三崎からの手紙は長く、玉埜からの返事はそっけなかった。三崎が手紙を出した理由を丁寧に書いたものに対して、「おまえ、うるさい。黙れ。気持ち悪い。ショッピングセンタームラハマの屋上から落ちて死ぬ。」と、玉埜は感情むき出しの返事を書いている。

それでも、三崎が粘り強く、身の上話なども交えながら手紙をしたためると、会話が少しずつ成立してくるようになった。靴箱レターのため、早くても返事に1日かかる。そのように、2人のやり取りはそれなりに長く、ゆっくりと続いていく。そして、靴箱レターが三崎の突然の転校により終了した。そのときの玉埜の手紙は、それなりの長さで三崎への思いが書かれるようになっていく。最後には「三崎さん、会いたいです。」と締めくくられている。

靴箱レターは、やり取りに偏りは見られるものの、気持ちの交流がしっかりと行われ、ゆっくりとではあるが、親しみなど双方に変化を着実にもたらしていることがわかる。

次は、2人が社会人になった後やり取りされた、ケータイメールでの手紙である。この時も、突然三崎から手紙が届く。そして、近況報告とともに返事はメルアドに欲しいと連絡先が書かれていた。それへの玉埜からの返信には、メルアドに加え携帯電話番号も書き加えられていた。

最初は、メールのわりには長めの文面がお互い続いている。近況を詳しく伝えたいと考えたことと、すでに述べたバス事故のことが話題の中心になっていたからだろう。そのうち、数行程度の文面が頻繁にやり取りされるようになっていく。ときには、三崎のメールに「メールしてシャワーを浴びて出てきたら返事が来てたので、驚きました。玉埜くんの言う通りです。私もそう思います。玉埜くんはとても

正しい。すごく正しい。ごめんなさい。でもそれは出来ないんです。」と、話の続きのようなメールが繰り返されるようになる。

一方、玉埜のメールで「まだ寝ないでください。電話もらえませんか。直接話したい。」という要望に対して、三崎は「電話はやめておきます。これがわたしと玉埜くんのちょうどよい距離感なのだと思います。…」と答えている。やり取りはしたいが、近づきすぎずに一定の距離感を保ちたいと考え、三崎がメールのみを選択していることがわかる。メールでのやり取りは、スピーディーなものも多く見られるようになり、その多くは1行程度のメールになっている。このあたりが、ある程度の時間を前提として必要とする、手紙のやり取りとの違いである。

このように、メールでのやり取りはその時間が速くなるだけでなく、やり取りするタイミングや内容の質量ともにムラが生じやすい。そして、スピーディーなメールになるほど文面は簡単になり、感情が先走った内容になりがちであることがわかる。また、三崎が意図したメールで生まれる距離感も、ときには電話で話したくなるなど不安定さが出てくる。一般的に手紙のやり取りに比べるとメールの場合は、冷静さより感情が出やすく、タイミングや内容などが一定にならない不安定さが目立っている。このことは、お互いの関係が時間とともに少しずつ深まるよりも、その時々で関係が不安定になりやすい様子が窺える。

最後の方に出てくる、玉埜が拘置所から出した手書きの手紙は、現在の状況について長く丁寧かつ冷静に書かれている。じっくりと考えて書く時間があることで、適切な言葉を丁寧に選びながら、考えをしっかりと巡らせて書かれている様子がイメージできる。

この事例はフィクションとはいえ、靴箱レター、ケータイメール、手書きの手紙と、往復書簡のさまざまなスタイルやその特徴に気づかせてくれる。

その他、この事例からわかることをいくつか列挙してみよう。

2人の距離感については、メディアが変われば、そのメディア特性に応じて変わる。通常の手書きによる時間のかかる手紙の場合は、安定した関係の1つである「つかず離れず」の距離が生まれ、維持されていく。しかし、メールの場合は異なっている。一定の距離を保ちつつも、感情の変化に応じ、ときに近づいたり離れたりと、距離感是不安定に揺れ動く。このような変化は、内容だけでなく、利用する

メディアによっても影響を受けやすいことがわかる。さらに、関係の変化については、手紙を通して相互理解が深まっていく様子がうかがえる。靴箱レターでは、ゆっくりとではあるが、三崎の行為に対して玉埜の気持ちが拒絶から好意に転換していく。ただ、10年以上過ぎた社会人のときのメールでのやり取りは、お互いの存在を嬉しく思いつつ、どの程度の距離感を保てばよいかについて迷いが見て取れる。好意的な関係は維持されるが、ときに混乱も見られる。しかし、お互いの関係がより深まっていくことは確かである。

5. 考察

今回採り上げた往復書簡は、いずれも企画し編集されたものである。その点を考慮した上で、文通の価値につながる往復書簡による示唆、もう少し端的に言えば、文通という継続的なやり取りがもたらす双方の変化に注目したい。

(1)小島氏と佐藤氏の場合は、小島氏がやり取りを通して、抱えていた重いテーマについての見通しが描けるようになった点である。そして、お互いの関係が「シスターフッド」と思えるまでになったという、小島氏側の変化が明確に出ている。佐藤氏にとっては、相手を深く理解することで、自分の生きた時代や世代が抱える価値観との違いが明確になったことがいえる。また、同時に自分の人生を改めて振り返り、意味づけをする機会にもなったと考えられる。さらに、小島氏との近い関係が築けたことも変化といえるが、小島氏に比べれば小さめの変化に見える。

(2)松本幸四郎氏とたか子氏の場合は、明らかに親子としての相互理解が、手紙のやり取りを通して一歩深まった様子が見て取れる。それは、双方にとって冷静に本音を伝えられるメディアとして手紙が機能しているからだといえる。たか子氏の「会話より多くのことを伝え合っている」「人に伝えたいことはたくさんある」「演技ではない、ありのままの私達の関係を、このやり取りの中で実感している」といった手紙への実感や、幸四郎氏の「こんなに親密で正直で明けた関係」「手紙を書きながら、毎回僕自身の来し方を振り返る」といった手紙体験がもたらす自身の変化が、親子という身近な関係でありながら、さらなる関係の深まりを示している。

(3)玉埜と三崎の場合はフィクションだが、作者である坂元の描きたい関係イメージとして、手紙や

メールを通して双方の関係が着実に深まっていく様子が描かれている。手紙とメールという、近づきすぎない距離感が伴うやり取りゆえに、心の交流としての関係が逆に際立ち、その場にはないことがかえって関係を深めている様子が見て取れる。さらに、手紙とメールの違いによってもたらされる関係の変化についても、あくまで坂元のイメージではあるが、気づくことができる。

手紙をやり取りすることは、まず双方の間に「時間」と「距離」を置くことを意味している。そして、それらを前提としながら、本音でのやり取りを通して、ゆっくりと関係を深めていくことにつながっていくことがわかる。一方、メールでのやり取りと比較すると、やり取りの頻度は増える一方、タイミングや内容の質量ともに安定せず、さらに冷静な考えよりも感情が先走りし、関係も不安定なものになりがちなりスクを孕むことがわかる。これは、メディア特性がもたらす傾向に他ならないが、安定した関係を育てていくには手紙が最もふさわしいと改めてわかる。

なお、実際の文通には、他にも関係を深めることにつながる要素が多い。たとえば、手書きの文面の他、相手に気持ちを伝える便箋や封筒、相手を意識した切手などのセレクトがイメージできる。それらはすべて手間をかけること、すなわち時間をうまく利用することで、関係を深める効果をより増幅させることにつながっている。

今回は、活字化された文面のやり取りがもたらす変化に限定されるが、実際の文通ではさらに関係の変化を促進できる工夫が、いろいろ埋め込まれている点を強調しておきたい。

6. 結論と今後の課題

今回の研究では、往復書簡の事例から文通の価値につながる関係の変化に注目してきた。そして、3つの事例ではいずれも、親密さや相互理解の深まりがみられた。

一方、3つ目の事例では、手紙とメールのやり取りによる変化の違いに注目した。その結果、手紙では少しずつ関係が安定的に深まっていくのに対し、メールでは親しみは深まりつつも、関係はその時々で不安定になる場合がみられた。また、手紙では冷静でまとまった考えがやり取りされるのに対し、メールでは感情が先走りした短い内容のやり取りがときに見られた。それは、双方の間に一定の距離と

時間が置かれているかどうかに関係していると推察できる。ただ、今回の限られた事例だけでは確定できず、仮説止まりだと考えている。この点が、今回の結論である。

今後の課題としては、まず以上の仮説を検証することである。さらに、文通を親密さと相互理解、信頼関係を築くコミュニケーションの仕掛けとして捉えたとき、それを支える必要条件を明確にすることである。

経験的に何となく感じていることを、言葉にすることは意外に難しい。文通の魅力もそれに似ている。歴史のある手紙文化を、文通という切り口を通して現代的に再評価していくことは、いままさに求められているコミュニケーション研究だと考えている。

参考文献

- 佐藤愛子、小島慶子『あなたは酢ダコが好きか嫌いか』小学館、2020
- 松本幸四郎、松たか子『父と娘の往復書簡』文春文庫、2011
- 坂元裕二『往復書簡 初恋と不倫』リトルモア、2017
- 宮田穰『ネット時代の手紙学』北樹出版、2019
- 宮田穰『文通びと』日本橋出版、2021

添付資料〔往復書簡の研究素材〕

書名／※初出	当事者	備考
『漱石・子規 往復書簡集』和田茂樹編、岩波文庫、2002	夏目漱石×正岡子規	高等中学校の同級生
『谷崎潤一郎＝渡辺千萬子 往復書簡』中公文庫、2006 ※単行本、中央公論新社、2001	谷崎潤一郎×渡辺千萬子	親族、義理の親子
『川端康成・三島由紀夫 往復書簡』新潮文庫、2000 ※単行本、新潮社、1997	川端康成×三島由紀夫	作家仲間
『若き日の友情 辻邦夫・北杜夫 往復書簡』新潮文庫、2012 ※単行本、新潮社、2012	辻邦夫×北杜夫	旧制高校の友人
『神谷美恵子・浦口真左 往復書簡集』みすず書房、1985	神谷美恵子×浦口真左	アメリカ留学時代の友人
『死刑囚 永山則夫の花嫁』嵯峨仁朗・柏艸舎編、柏艸舎、2017	永山則夫×和美	犯罪者と妻、獄中結婚
『わたしを超えてーいのちの往復書簡』中央公論新社、2007	玄侑宗久×岸本葉子	作家・僧侶とエッセイスト
『あなたは酢ダコが好きか嫌いかな』小学館、2020 ※「女性セブン」連載2018年1～5月	佐藤愛子×小島慶子	作家とエッセイスト
『露の身ながら 往復書簡いのちへの対話』集英社文庫、2008 ※単行本、集英社、2004	多田富雄×柳澤桂子	免疫学者と遺伝学者
『蛙の子は蛙の子』ちくま文庫、2000 ※単行本、筑摩書房、1997	阿川弘之×阿川佐和子	親子、作家とエッセイスト
『井上ひさしから、娘へ 57通の往復書簡』文藝春秋、2017 ※広報誌「月刊いちかわ」2004年7月～2009年12月	井上ひさし×井上綾	親子、作家と娘
『父と娘の往復書簡』文春文庫、2011 ※「オール讀物」連載2006年5月～2008年4月	松本幸四郎×松たか子	親子、役者同士
『なにたべた？ 伊藤比呂美+枝元なほみ 往復書簡』中公文庫、2011 ※単行本、マガジンハウス、1999	伊藤比呂美、枝元なほみ	友人、詩人と料理研究家
『詩と死をむすぶもの 詩人と医師の往復書簡』朝日文庫、2015 ※単行本、朝日新聞出版、2008	谷川俊太郎×徳永進	詩人と医師
『東田くん、どう思う？ 自閉症者と精神科医の往復書簡』KADOKAWA、2019 ※単行本、ビッグイシュー日本、2016	東田直樹×山登敬之	自閉症者と精神科医
『こころの病を生きる』中央法規出版、2005	佐野卓志×三好典彦	統合失調症患者と精神科医
『往復書簡 初恋と不倫』リトルモア、2017 ※2012～2014に3回公演。	坂元裕二	脚本家 朗読劇として創作された。
『急に具合が悪くなる』晶文社、2019	宮野真生子×磯野真穂	哲学者と人類学者
『往復書簡 無目的な思索の応答』朝日出版社、2019 ※「東京新聞」「中日新聞」連載2016～18	又吉直樹×武田砂鉄	作家・お笑い芸人とエッセイスト
『往復書簡 限界から始まる』幻冬舎、2021 ※「小説幻冬」2020年7月号～2021年6月号	上野千鶴子×鈴木涼美	社会学者とフリーライター